

## 第1章 未開の原野から夜明けへ〜古代から開拓直前まで

### 第1節 古代

#### ■大昔のわがまちは

「出たあー、ついに出了」―昭和47年（1972年）10月、大谷地区の平地帯（水田等）から石器などを発掘していた作業員から歓喜の声が上がった。今から約1万7,000年前の「ホロカ型彫器」が発見された瞬間である。

町の歴史は百数十年だが、1万年以上も前の石器類が発見されたことは、この地に人々が生活していたとみられる証でもある。

さらにその前のこの地域は、というと…

およそ7,000万年前に日高山脈が隆起し陸地を形成、その後火山脈の大噴出によって北見地方一帯も形成された。その後も火山活動が活発で、それにより陸地が浮き沈み、現在の常呂川筋に北見地方は陥没と隆起を繰り返してきたのである。

約3万3,000年以前には屈斜路火山の活動により、大量の火山灰が北見盆地にもたらされ、常呂川が徐々にせき止められ、湖ができた。これは「古北見湖」といわれ、現在の屈斜路湖に相当する大きさだったといわれている。湖の北および東の端は現北見市北見と北見市端野町の境界付近、西および南側は、現北見市の常川辺りとされ、現在の訓子府町大谷地区近くまで湖があり、「クネネツプ原野」の大昔は、一部湖底だったことになる。

その後、火山活動の隆起による湖の陸地化、地盤の上昇、常呂川の氾濫などで砂や小石が堆積、その上に火山灰も堆積し台地を形成、堆積した台地は常呂川の流れに削られながら河岸段丘となり、その流域は沖積平野<sup>ちゅうせきへい</sup>として形成され、「北見盆地」が完成したのである。

北見盆地は、常呂川とその支流の訓子府川、無加川、仁頃川の流域に発達した盆地で、後のクネネツプ原野も含まれている。肥沃な大地の基礎が生まれ、開拓先人さらに多くの町民の力によって「農業の町・訓子府」の大地が成熟していくのである。

※河岸段丘Ⅱかがんだんきゅう。河川に沿った階段状の地形

※沖積平野Ⅱちゅうせきへいや。河川の堆積作用によってできた平野

### ■旧石器人もいた？

大谷の水田などから発掘された石器に多くの研究者、発掘作業員たちが歓喜したが、町内には、報告書が発刊された遺跡は7か所あり、ほかにも多数の遺跡が発見されている。

日本を代表する考古学者、加藤晋平と鶴丸俊明、大井晴男らが昭和33年（1958年）10月から同47年（1972年）11月にかけて発掘調査をしたのが、緑丘B遺跡と増田遺跡である。

増田遺跡は、現居武士小学校の東約500メートルのところであり、発掘調査は236平方メートルの範囲で行われ、約1万3,000年前、旧石器時代の石器類が出土している。加藤らは、同46年（1971年）10月と同47年10月から11月にかけて2回発掘調査を行い、合わせて約7,000点の石器が出土した。

特に2回目の発掘調査で出土した「ホロカ型彫器」は学術的に貴重で、この地方でもかなり古い時代の遺物ということに加藤らは注目し、ほかにも考古学の資料が数多く出土しており、出土石器などから1万7,000年前から1万2,000年前の間に使用されたことを明らかにした。

さまざまな石器類は、その用途に応じて、黒曜石や流紋岩など異なる種類の石を用い、先の形を変えるなど、1万年以上も前の人々の知識や経験がうかがえる。遺構は見つかっていないが、「まだ現れぬ訓子府」に旧石器人が狩猟などで一時的にも滞在していたことが分かる、太古のロマンが漂うまちでもある。

◇黄褐色土の発掘に入って2日目、D地点の田んぼのちようど真ん中あたりで「出たあー」という声がありました。とうとうホロカ型彫器が発見されたのです。11月のみぞれの降る中で、たき火で体を温めながら作業していた皆の間には、なぜか言葉はなくとも、顔には笑が浮かんでいたものでした。「こいつ、てこずらせやがって。でもとうとう出てきたなあ……」そんな安堵の笑だったかもしれません。(中略)遺物の数が多いだけでなく、石器の種類が多いこと、しかもそれらが黄褐色粘土の中に集中してあったことは、後の研究の時に大変役立ちます。(訓子府町教育委員会発行「大昔のくんねつぷい」から)

※ホロカ型彫器は大型で細長い石片の端を斜めに打ち削って鋭い刃を作り出した石器。名前の由来は、旧白滝村(現遠軽町)の幌加沢(ほろかざわ)からきており、こうした形状(技法)の石器は、この地区からも多く出土している。



ホロカ型彫器

## 第2節 開拓前

### ■幕末の探検家が日ออกมาで来ていた

アイヌ民族の歴史（後述）だけではなく、旧石器人の歴史も存在していた訓子府。さらに幕末の探検家もこの地を訪れている。

「北海道」、「北見国」（現宗谷とオホーツク管内）の命名者、松浦武四郎である。武四郎は、全国各地を巡り、土地の風土や文化を記録、28歳のときから蝦夷地（現在の北海道）に入り、13年間で6回の調査（踏査）を行い、多くの資料を残している。

安政5年（1858年）に常呂川上流を探検し、このときの調査内容を「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中 第二五巻西部登古呂誌」に記している。武四郎は、函館から斜里に入り、5月13日（旧暦。現在の暦では6月23日）に常呂に到着。翌日、土地のアイヌ民族に案内を依頼し、丸木船で常呂川を遡上したのである。

その経路は、常呂川は現在の北見市中ノ島（公園）まで上り、そこから無加川を遡り、タ  
ンネマクベツ（現北見市相内町辺り）で無加川を渡りモイワ山（現北見市美園）、クンネツ  
プ川、クンネツプ台地を越えて常呂川に出た。ここで武四郎は案内のアイヌ民族と野宿をし  
た。アイヌ民族にその場所を尋ねると「クツタルシベ（イタドリのたくさん生えているところ）」と答えたという。武四郎の登古呂誌やその後で作られた地図では、現在の西15号線から17号線の常呂川付近、日出市街地の対岸辺りと思われる。

この周辺は、後にアイヌ民族が居住し、さらにその後訓子府の開拓の夜明けとなる北光社

移民団が入植したところからも近く、まさしく現在の字名「日出」にふさわしい歴史を持っていることになる。

## ■「クンネップ」の登場

アイヌ語「クンネフ」。「クンネフ」との表記もあり、これは江戸期に濁点や半濁点を省略していたことから使用されていた。後に「クンネツプ」が「訓子府」の語源のアイヌ語として一般的に使用されてきた。アイヌ語で「クンネツプ」黒いところ、やち川にして水黒し」という当時の姿を称していたものである。

武四郎の地図にこの地方は「クン子（ネ）フ」と出ており、現在の置戸町秋田から北見市北光までのモイワ山山稜とクンネツプ台地の間を流れるクンネツプ川一帯を示す地名だった。「クンネツプ」。この名称が世に本格的に登場したのは、明治16年（1883年）。現在の北見地方一帯を管轄する「常呂外六カ村戸長役場」が常呂村に開設されたときである。訓子府地区は単に「クンネツプ（原野）」とだけ呼ばれていた。

同22年（1889年）から北見地方の原野の測量が始まり、「クンネツプ原野」が植民（殖民）区画地に選定され、同24年（1891年）に野付牛を基点に西19号線までの区画で測量が行われ、いよいよ本格的な開拓に向けての準備が始まった。

※明治24年に北海道庁第二部殖民課が発行した「北海道殖民地撰定報文 第一」および「同報文 完」には「北見国常呂郡」の原野としてトコロ、ノツケウシ、ムカソとしてクンネツプ各原野の地理等が記されている。また、同年に北海道庁発行の北見国常呂郡クンネツプ原野区画図に

は西1号線から西22号線までがクンネツプ原野の範囲とされている。

※植民（殖民）区画地＝開拓し、道路などを造り、人が住める区画にするための土地。明治19年（1886年）に北海道庁の「殖民地撰（選）定事業」が始まった。ここでは現代用語として「植」の漢字を使用。

※アイヌ語の研究で知られる伊藤公平さん（北見市在住）は、「クンネツプ」の漢字表記について、「自治体名としては、大正9年に旧置戸村から分村するときの道庁の告示が正式ですが、明治33年に『訓子府尋常小学校』開校（現上常呂小学校）、明治39年に『訓子府駅通』開設、明治41年に『訓子府教育所』開校など施設等により漢字表記された記録等もある。しかし、こちら一帯はクンネツプ原野という呼び方、表記であり、また、『カミトコロ原野』と重複しているとの記述も見られ、どの時点で『訓子府』の文字が充てられたかは、さまざまな説もあり、断定はできない」と話している。

### ■開拓前、アイヌ民族や松浦武四郎のほかにも数人が原野入り

松浦武四郎のクンネツプ原野調査のあと、訓子府町史には、明治15年（1882年）に奈良県十津川村の原鐵次郎が「馬を引いて十勝から利別川を上り、ケトナイ沢に出て、常呂川を下る」とあるほか、明治19年（1886年）に「東京の人 杉村某、狩猟のためアイヌを伴い、オロムシ（オロオムシ 現在の大谷）に入る」とあり、一時、滞在し東京に戻った。このときのアイヌ民族は、平村エレコーク、ヌシャアングルウスらで、狩猟しながら10年ほど居住していたといわれ、本町居住者の始めとされている。

また、同27年（1894年）には「網走の高橋嘉市 本町地区でクルミを伐採し、常呂川を流送」との記述もあり、本町開拓前にさまざまな目的で多くの人が原野入りしていたようである。

※オロムシ・オロムシ 訓子府町史ではアイヌ語で「オロ・オ・ムシ」糸をとるカイ草（イラクサ類）のあるところ」と記載されている。前出の伊藤公平さんは、このほかに「くんねつぶの文化財シリーズNo.8 訓子府町のアイヌ語地名」の中で、松浦武四郎の「戊午日誌」などを引用し、「①オロ・ウム・ウシ・イ『その内側（奥の方）・音が・たくさん出る・所』で、武四郎は『オロムシ沢の奥は雷の発生しやすい所』と記している。また②オロ・ム・ウシ・イ『その内側（奥の方）・ふさがっている・いつもそうになっている・所』とし、奥はふさがっている、行き止まりの所との解釈もあると記載している。

### ■坂本直寛ら、開拓前年に原野を調査

幕末の偉人・坂本竜馬の甥、直寛らが北の原野に光を求めて、また、光を灯すため北海道開拓計画を進め、クンネツプ原野を選定しその調査に本格的に入ったのは、開拓前年の明治29年（1896年）だった。

この年8月18日に直寛は、北海道庁からクンネツプ原野567万坪を貸し下げ予定地として許可され、その2日後の8月20日に澤本楠弥（北光社2代目社長）と札幌を出発、汽車、徒歩で東の未開の大地をめざした。途中、浦臼（高知県民の開拓による聖園農場）から合流した前田駒次（後の野付牛村長、北海道議会議員）とともに、25日に相内駅通（現北見市東

相内町)に到着した。

翌26日には、朝7時過ぎに相内駅通を出発し、徒歩で原野を踏査した。背丈以上もある草、湿地帯により、なかなか前進できず、クンネップ原野はまさしく「未開の大地」であった。このため、27日には、アイヌ民族を案内者として馬に乗って原野を踏査、このときは、馬からの雄大な景色に感嘆の声をあげた。

原野踏査を終えた直寛らは、網走へ向かい、高知県の北光社事務所へ移民団先発隊の募集を求める電報を打ち、いよいよクンネップ原野開拓のスタートラインに立ったのである。

※坂本直寛は、クンネップ原野に到着した日の光景などを自身の著「余が信仰之経歴 続編」の第三「予が拓殖事業を発起したる元由」で、移民の適地と判断したことを次のように記している。

この文章は、「続訓子府町史」や「北光社 はたして北の国に義の国は建設できたのか」(橋爪実著)でも引用している。

◇「原野の地形は四方山を以て籠み僅に東北の一隅開けてムカ川に接し對(対)岸の屯田兵村と境せり、全野の風光實(実)に快活にして人をして凄孤の感無からしむるを以て移民の為には甚だ都合好しと思へり(以下略)」

※凄孤<sub>せいこ</sub>。せいこ。すごく寂しい、ひどく無力の意だと思われる。「ひどく無力な感じとはさせない」  
—ゼロからまちをつくるため移民には好都合というように感じたと思像する。

事前調査を終えた直寛からの電報を受け、高知県の北光社事務所では「土陽新聞」(明治29年9月5日付)に入植者および準備のための先発隊の募集記事を掲載した。

※ 駅通<sup>11</sup>えきてい。開拓地への移動や旅行者などの交通の便を図る交通制度の一つ。宿泊や郵便などの業務を行っていた。

### ■大谷清虎率いる先発隊が原野入り

この先発隊は13人で構成され、明治29年（1896年）10月から12月にかけて、翌30年（1897年）に入植・移住する予定の北光社移民団のための準備作業を行った。この先発隊の引率責任者が、訓子府の入植第1号の一人、大谷清虎であった。先発隊の目的は、移民団の住宅（移民小屋）と本部事務所の建設などであった。

現在の北見市北光の北光八幡神社に隣接する北光社本部跡辺りに本部事務所を建設したほか、現上常呂から訓子府町大谷辺りまでの原野に、約120棟、うち「オロムシ地区」では13棟の小屋を建てるなど入植準備作業を進めた。その後大谷は一時帰郷、その他の先発隊は本部事務所で寒さ厳しい冬を越したという。



開拓者のために移民小屋が用意された